

第1章

社会学の歴史

第1節 社会学史

「社会学」の研究対象というべき「社会」とは何かを明らかにする試み（方法論）には、様々なものがある。

■社会学の方法論

方法	内容	論者
方法論的個人主義	・実在するのは個人 ・社会や集団は後付けにすぎない	M.ウェーバー
方法論的集合主義	・社会は、個人とは別に独立して存在している	デュルケム
方法論的關係主義	・個人や社会のように、実在を特定して議論するのではなく、関係によって現れるものから議論を始める	G.ジンメル

1 デュルケム『自殺論』

デュルケムの『自殺論』は、自殺について、個人的事情というより、社会の持つ規制力といった力の作用によって引き起こされると論じている。

2 M.ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

M.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、プロテスタンティズムの倫理に動機づけられた勤勉と倹約を基調とする人々の労働活動が、予期せざる結果として近代資本主義を成立せしめる原動力となったと論じている。

3 G.ジンメル「形式社会学」

「形式社会学」とは、個人間の心的相互作用の形式（社会化の形式）を探究する社会学である。ここでいう「心的相互作用」とは、個人が相互に他者に志向し、作用を及ぼし合うことをいう。ジンメルは、社会はこの相互作用において成立するとしている。

この相互作用は、内容と形式に分けることができる。「内容」は、人々の意欲・関心・目的のことである（例：政治や経済、宗教といった相互作用においては、政治目的、経済的利益、信仰心のこと）。「形式」は人々の関係性のことである（上下関係、競争関係、闘争関係）。

例題 国家専門職 平成 28 年度改題

次は、G. ジンメルに関する記述であるが、A、B、Cに当てはまるものの組合せとして妥当なのはどれか。

G. ジンメルは、複雑化する社会における個人の問題に関心をもち、社会实在論と社会名目論をともに排し、広義の社会を諸個人間の[A]としてとらえた。そしてこの[A]の示す様式を社会化の[B]と呼び、[B]社会学を成立させた。

彼は、社会化の[B]を経済、宗教などの社会化の内容から区別して研究することによって、社会学を他の社会諸科学から区別された特殊専門科学として樹立することができる」と主張し、『C』などを著した。

正解

A：心的相互作用 B：形式 C：社会学

4 アメリカの社会学

(1) はじめに

20 世紀中頃、社会学はアメリカを中心に発達している。19 世紀末には、シカゴ大学に世界で初めて社会学部が創設され、「シカゴ学派」と呼ばれる一大学派が形成されるほどであった。シカゴ学派の特徴は、理論的・哲学的な社会学ではなく、フィールドワークを中心とした社会学である点にある。

(2) 意味学派の台頭

「意味学派」とは、パーソンズの機能主義社会学を批判する文脈の中から 1960 年代アメリカで発達した諸派である。

■意味学派（代表的なもの）

シンボリック相互作用論（ブルーマー）	・社会は「共有されたシンボル」により形成されるという考えのこと ・前提として、①人間はものごとに意味を付与し、その意味に基づき行動すること、②意味は社会相互作用の中から形成されること、③意味は人間によって解釈されることを挙げている
ドラマトルギー（演劇論的アプローチ）（ゴフマン）	・社会を劇場、人々をそこで演技する俳優に例えて、人々の相互行為を分析しようという手法のこと ・人々は自信を演出してみせることにより（自己呈示）、他者が自身に対して抱く印象を管理しようとする（印象操作）
現象学的社会学（シュッツ）	・日常生活世界において、人々はどうのように他者を理解し、現実世界を構成しているのかを分析しようという手法のこと
エストメソドロジー（ガーフィンケル）	・人々が日常生活の中で「自明な領域（常識）」を作り維持していく過程を、具体的な行動や会話の観察を通じて明らかにしようという手法のこと ・エストメソドロジーはガーフィンケルによる造語（ethno（人々の）、method（方法の）、ology（学））